



人生の選択

Choose to be yourself

永田円了

人生を運命、偶然、選択という観点で語ることができる。自分の生まれ、例えば、人種・国籍などは、自分ではどうしようもできない運命である。また、ある時に誰かに出会う、これも自分では予測できない偶然である。ということは、選択のみが自らの意志でどうにかできる唯一のものとなる。そして、自分がそのとき何を選びとるかによって、人生の道のりが決まるのである。

スティーブ・ジョブズの選択

スティーブ・ジョブズを例に、運命・偶然・選択を検証してみる。ジョブズは、未婚の大学院生の母をもつ運命を背負った。養子に出されたとき、偶然にカリフォルニア州シリコンバレー近くに住む夫婦に育てられた。大学を中退し、Calligraphy（飾り文字）コースをもぐりで受講する選択をする。また、自らが創立したアップル社をクビになったとき、ゼロからの出発を選択した。ジョブズ、30歳のときである。



“選択の可能性がなければ、私たちはただの構成員、道具、あるいは物にすぎない”

詩人 アーチボルト・マクリーシュ

真の選択とは、

なぜ世の中には、苦しみを率先して選択しているとしか思えない人たちがいるのだろうか。再婚したパートナーがまた暴力を振るう人だった。今度こそ新しい人生を、と思って選択したはずなのに、また同じタイプの人を選んではまった。慎重に選択しているはずなのに、何故なのか。



人は無意識に、既存の思考パターンの中で考え、行動を起こす。一見新しい第一歩のように見えて、実は今まで通りの選択を繰り返しているのである。これは、パターン化した思考のリアクションにすぎず、選択と呼ぶには相応しくない。思考（マインド）は、常に既知のものにくっこうとする。思考にとって、本当に新しいこと、未知なるものはコントロールが効かないからである。

真の選択とは、今までの思考パターンを自ら切り離すことで生まれる決断のことを言うのである。

“やりたい事”から“やるべき事”に意識をシフトして、福祉施設職員として生き生きとした50代をおくる元NHKアナウンサー・内多勝康氏の事例。岩に腕を挟まれ、生きるために自ら右腕を切断するという究極の選択をした冒険家・アーロン・ラルストンの事例。人生の選択とは、まさに断崖から飛び降りることでしか味わえないようなスリルと冒険の物語なのである。

<事例 DVD等>

ジャン・ポール・サルトル / 実存は本質に先立つ
元NHKアナウンサー・内多 勝康氏の選択/福祉施設職員として
サワコの朝/デヴィ夫人の選択/スカルノ大統領のプロポーズ
サワコの朝/ホラン千秋さんの選択/間口を広げると、
東京ラブストーリー/あの日あの時あの場所で、...
運命の出会い/ドラクロアより
113回目のお見合い/46歳でのゴールイン
シーナ・アイエンガー/コロンビア大教授/運命・偶然・選択
二百三高知/参謀会議/新しい選択を迫る
究極の選択/映画「127時間」/アーロン・ラルストンの選択
歌・矢沢永吉 It's up to you “あなたが決めるよ”

円了のホームページ: www.enryo.jp

